

「田園回帰」の潮流／農村にこそ未来がある！

谷口吉光（秋田県立大学）

過疎化、人口減少、集落消滅など、農山漁村には暗い未来しかないと言われてきたが、最近「そんなことはない。農村にこそ未来がある」と思わせる動きが広がっている。

「田園回帰」と呼ばれる若い世代の新しいうねりのことである。2014年の内閣府の調査によると、「将来は農村に住みたい」と考える都市住民の割合は20代や30代では30%から40%にもなるという（小田切徳美他、「田園回帰がひらく未来」、岩波ブックレット）。吉幾三の歌ではないが、「おらの村には何にもねえ。おらこんな村いやだ。東京さ出て行くだ」と都会への憧れ一色に染まっていた世代から見れば、都会育ちの若者がなぜ「村に住みたい」などと思うのか、理解できないことかもしれない。

しかし、私自身、10年ほど前から秋田に帰ってくる若者が増えていることを実感していた。秋田出身者が帰ってくる「Uターン」も、県外出身者が移住してくる「Iターン」もあった。それも単に人数が増えたというだけでなく、自ら起業したり、新しい事業や暮らしのスタイルを堂々と打ち出したりする、いわば「インパクトのある若者」が格段に増えたと思う。

たとえば、川から海に出て行った鮭の稚魚が立派に成長してふるさとの川に続々と帰ってきているとでも言えいいだろうか（Iターンの人にとっても、その場所に定住すると決めれば「ふるさとに帰る」と言っていいたいだろう）。

彼らのおかげで秋田の経済や社会にずいぶん活気が出てきた。古い慣習やしがらみにとらわれない、斬新な取り組みが各地で見られるようになった。若い世代が地元から信頼されて、その取り組みが着実に根づいていくことを心から願っている。

それでは若者は何を求めて農村に帰ってくるのだろうか。秋田県の人口問題対策課に話を聞いたところ、「自分のチャレンジや自己実現の場」や「安心して子育てができる場所」として農村を見る人が多いという。

驚いたのは、2015年の移住希望先ランキングで秋田県が8位に入ったことだ（「ふるさと回帰センター」調べ）。上位20位までの都道府県はほとんどが東京以西にあり、東北地方では秋田県と福島県（16位）しか入っていない。これは県や市町村のPR努力の賜という面もあるが、東京から遠く雪や冬というハンディがあるにもかかわらず、秋田が住みやすく、人の心が温かい場所だということが素直に評価されたと見るべきだろう。

もうひとつ田園回帰の大きな原因として、「東日本大震災によって都市住民の価値観に大きな変化があったのではないか」という意見も聞いた。災害に対して都市が非常に脆弱だということを身を以て知った人々が本当に安心して暮らせる場所として農村を選んでいるというのだ。だとすれば、田園回帰は一過性の現象ではなく、時代の潮目の変化を表していることになる。「農村にこそ未来がある」。若者たちと一緒にこの可能性を追求していくべきだろう。

（朝日新聞「あきたを語ろう」 2016年5月29日掲載分に加筆・修正した）